

用水路と女性たち

過酷な労働と感染症からの解放

PMS (平和医療団・日本) 総院長 / ベシヤワール会現地代表 中村哲

回外圧でなく、納得できる言葉で

「報告に女性が登場しない」とよく言われるが、述べにくいには訳がある。

二〇〇一年、米軍がアフガニスタンに進駐して間もなく、性差別の問題が盛んに論議された時期があった。女性の地位向上が叫ばれ、女子児童の就学率から職業まで見直され、「イスラムの後進性」が盛んに攻撃された。国連や外国NGO(非政府組織)は女性職員の割り当てを増やし、率先して範を垂れた。

その直前までタリバン旧政権が女学校を禁止し、医師以外の女性の就労を制限していたからだ。折から性差別が世界的な問題になった時期だったので、権力を得て勢いに乗った外国勢のキャンペーンは凄まじいものがあった。まるでイスラム教徒であることが悪いことであるかのような雰囲気さえ横行した。

我々PMS(平和医療団・日本)は「生命と水」を前面に掲げ、このような思想・文化方面の動きとは別の次元で動いていた。

米軍進駐を経た後、多くの「アフガン復興」の主題は「物心両面における近代化」と言えたが、旧ソ連の侵攻(一九七九年)以来、当地で進められた近代化の実態を眺めてきた身には、どこかで見た光景に思え、素直に同調できなかったのだ。

アフガン人にとってイスラム教とは人間の皮膚以上に密接なもので、生活の隅々までを律する精神文化だ。その中に女性の地位向上を肯定する考えがない訳ではない。

外圧でなく、彼女たちが納得できる言葉で語られるべきだ。また、二〇〇〇年の大干ばつ後に襲ったあの飢餓地獄の中で、時流に乗り、権力を背景にこぶしを振り上げることに快からぬものを感じていた。

回地縁と血縁が社会の全て

我々の作業地は、パシュトゥン(パター)民族の世界である。パシュトゥンはアフガニスタン最大の民族で、人口二千万とも言われ、パキスタン北西部にも一千万人が国境を挟んで住む世界最大の部族社会だ。少数山岳民族もいるが、圧倒的多数のパシ

回重要なのは、温かい人間的関心

カブールのような大都市を除き、多数の女性たちが自ら権利を求めて叫ぶことは少なかったと思う。物言わぬ農村の女性にとつて、最も過酷な労働は水運びである。炎天下、水がめを頭に乘せ、時には数キロの道程を一日中徒歩で往来する。泉があちこちで涸れた現在、遠くの川まで行くが、濁流はすぐには使えない。大きな水がめに入れて一晩泥を沈殿させてから利用する。貴重な水は煮沸して料理や茶に使う。薪は高価なので、のどが渴けば川の水をすくって飲む。赤痢や腸チフスなど致命的な感染症

も起こしやすい。

我々が手掛ける用水路はこの水汲み労働と感染症の危険から女性たちを解放した。用水路沿いの地下水位が上がり、涸れ井戸が悉く復旧し、木がのびのびと育つ。家の近くから何度でも水が汲め、育つ木々は薪を提供する。用水路事業を誰よりも支持したのが彼女たちだった。実際、作業中に近所の家から「母からです」と子供たちが茶を届ける光景がしばしば見られた。気軽に異性に話しかける風習がないので、主婦たちが子供を代役に感謝を表したのである。診察室で診療するとき以外、我々が彼女たちと親しく話す機会はない。おそろしく、い

表紙写真によせて

用水路通水の小さな目撃者たち

2005年3月4日、現場スタッフや地元の作業員、共に働く日本人ワーカー、ジャララバード事務所やベシヤワール病院から駆け付けた職員たちが見守る中、マルワリード用水路D池の三連水門の堰板がはずされ、E、F、G地区へ送水が開始された。水が先へ進むにつれ、村の子供たちや大人たちが「ウブ、ウブラジー」(水だ、水が来た!)とだんだん集まって水の流れに併行して走り始めた。そのうちに用水路に飛び込んでしまわぬ子たち、けしの頭を棒で繋げた自家製のおもちゃを水の流れに合わせてコロコロ押している子、用水路の中を歩く中村医師をおそろおそろ取り囲んで群れ歩く子たちも。自分が造った箇所を無事に水が通るかドキドキしている日本人ワーカー達をよそに、子供たちは水の中でそれぞれに喜びを表している。頃合いをみてスタッフがターフィー(飴)をひとつかみ空にむけて「ムバーラク!」(おめでとう)とまくと、ワーッと大人も子供も、スタッフもどきどきに紛れて、一斉に笑いながら、しかし我先にと拾い集める。用水路の通水に立ちあったこの小さな目撃者たちが、今は二十歳過ぎの青年になっている。

【PMSの動き】

- (1) 6月1日、ガンベリ農場の養蜂計画で初の蜂蜜を収穫しました。
- (2) 7月、ラグマン州で用水路建設候補地の一次調査が終了しました。
- (3) 上記調査のため休講していたFAO関連事業のトレーニングが7月28日に再開されました。
- (4) 8月、犠牲祭の祝日で農業事業の他は1週間休業しました。
- (5) JICAの招聘で9月8日~15日まで、ジア医師、ディダール技師、ファヒーム技師、アジュマル技師が来日し、朝倉市で水利、農業視察・研修を行います。

つ実現するか分からぬ「権利」よりは、目の前の生存の方が重要であったのだろう。必要なのは思想ではなく、温かい人間的関心であった。

全ての者が和し、よく生きるためにこそ人権があるとすれば、男女差を超え、善人や悪人、敵味方さえ超え、人に与えられた恵みと倫理の普遍性を、我々は訴え続ける。

〔西日本新聞〕二〇一九年六月十七日朝刊より転載

ユトゥンと共に一つの文化圏を成す。「ワタシ(故郷)地縁」とカオミ(血縁)が社会の全て」と評されるほど、部族社会の様相を色濃く反映し、閉鎖的な農村は自治性が強く、実態は外部に伝わり難い。

このパシュトゥン民族の女性の外出着が「ブルカ」で、顔付近に網目の窓を残した布で全身をすっぽりと覆う。厳しい男女隔離の掟があり、日本では刑が軽すぎる婦女暴行は普通、死罪である。

かつてパシュトゥン民族で構成されるタリバンが、この衣装を首都カブールで強制して物議を醸した。西側では「女性抑圧の象徴」として一大キャンペーンが張られて過熱、パリなどでは公園の彫像にブルカを被せて擲し、被り物一切が禁止された。だが実はアフガン東部の女性の伝統的な外出着にすぎない。

元々「個人」や「自由」という考えはアフガン農村で薄かった。血縁・地縁社会の中で、いかに家族全体の安泰を図るかが関心事だ。男も女も、子供も、それぞれに役割を担ってその文化の中で生きていた。それを性急に変えようとした旧ソ連は反発を招き、大混乱を残して撤退した。一方、抵抗勢力を「自由の戦士」と呼び、大量の武器援助で内戦を泥沼化させた西側のマキャベリズム(目的のために手段を選ばないやり方)は、人道支援にさえ不信を招いた。